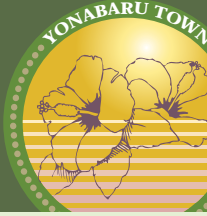




与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編集室

TEL098-871-9981 FAX098-871-9982 郵送先 〒901-1303 与那原町字与那原712番地



昭和23年から昭和24年頃、現在の第一中の健児の塔（摩文仁）が建立される以前の健児の塔。戦後、与那原から初めての参拝団。
写真集「よなばる 今・昔」より
作成協力者：金城 廣氏（江口区）

現在活動中の「与那原町史・戦時記録編」作成は、平成19年4月から聞き取り調査した体験者の証言の執筆にとりかかっています。戦前から戦後の復興の与那原の様子なども多く聞くことができました。調査結果の中から一部の証言及びご提供頂いた写真を掲載し、ご報告致します。

— 与那原町史編集委員会 —

- | | | | | | |
|-------------|---------------|------------------------|-------------|-----------------------|-----------------------|
| 委員長
吉浜 忍 | 副委員長
眞榮平 實 | 委員
新垣 庸一郎
渡名喜 興憲 | 委員
山内 敏春 | 事務局
辺土名 彬
恩河 直美 | 事務局
瀬底 雄子
富川 恵子 |
|-------------|---------------|------------------------|-------------|-----------------------|-----------------------|

むかし懐かしい 与那原にあった「商業」

与那原にあった商業を中心に写真を掲載致しました。与那原関連の古い写真などがありましたらご提供を宜しくお願いします。ご連絡頂けましたら、こちらからコピーに行きます。



「山内商店」昭和30年頃

場) 現新島区、屋比久菓子店の北側道向かい
提供者：山内俊光氏 (江口区)



昭和11年頃「森山醤油」

場) 現森下区オリオン通り 提供者：森山芳子さん (江口区)



「大城食堂」昭和30年頃

場) 現森下区 提供者：山内敏雄氏



「安谷屋商店」昭和26年、大綱曳きのシタクの集合写真

場) 現新島区の屋比久菓子店の場所にあった、安谷屋と由さんの商店



「ヤマミヤ商店」昭和26年3月

販売には糸満から泡瀬方面まで、
自転車で出かけていたとのこと。
(右後方のハンチング帽子の方は、宮城能章氏)



「瓦工場」

明治の頃より土質に恵まれ、与那原の特産品として担ってきた。
首里城の屋根の赤瓦に使用されたことは有名である。

**聞き取り調査
人々の証言**

南部へ避難

安谷屋 芳子
昭和5年生まれ
森下区

● **ラッパの音で起床**

当時の私の家族は、父の上原正俊と母のカメ、長姉の千恵子と兄の正吉と次姉の和子、そして三女の私と四女の妹、春子の七人家族だった。住んでいたところは、旧一区（新島区）で、与那原国民学校まで走って五分のところだった。今の与那原小学校から浜田区一帯には兵舎が建てられ、多くの日本兵が駐屯していた。

ある日、忘れ物を取りに家へ帰り学校へ戻るとき、兵舎の中で兵隊がラッパの練習をしているところが見えた。四人ぐらいの兵隊が並び、その前にはラッパの指導をしている兵隊が立っていた。間違えると殴られたりするのが見えた。私にとってラッパの音は、生活の一部になっていた。朝は、兵舎から聞こえてくる起床ラッパが目覚めた。その後、聞こえてくる歌で起き出し一日が始まるという感じであった。ラッパのメロディーに歌詞を付けて歌ったことを覚えている。

♪
起きろよ 起きろよ 朝起きろ
起きないと 隊長さんに叱られる

学校の朝礼やお昼の十二時もお兵舎から聞こえてくる音楽やラッパの音で時間の確認ができた。

また家では両親から言われて、毎日兵舎の周りの土手の草刈作業をした。軍事教練ではルーズ



与那原国民学校校舎。
(御殿山。現：青少年広場)

ベルト(米国大統領)やチャーチル(英国首相)の藁人形を立て、竹槍で突き刺す訓練があった。

● **十・十空襲**

私は、沖縄県立第二高等女学校の一年生だった。その日もいつも通り、朝の六時半に三両編成の汽車に乗り学校へ向かった。今の警察署辺りは緩やかな上り坂になっていたため、当時の汽車の馬力では一回で上ることが難しく、一回、二回と加速をつけ、その日は三回目でやっと上ることが出来た。今の大里(南城市)入り口辺りから徐々にスピードが出るようなものだった。国場駅を過ぎて古波蔵駅にさしかかかったとき、「空襲だ！」という声が聞こえて、汽車が停車

した。「みんな逃げて下さい」と言う声で、私は汽車を飛び降りて近くの山へ逃げた。そこから那覇の街が空襲されるのを見ていた。しばらくしてお昼の十二時前という声が聞こえ、弁当を開いて食べる男子生徒たちもいた。私は、与那原に帰るため山を下りた時、私達が乗っていた汽車も米軍の攻撃でやられていた。線路沿いを歩き与那覇(南風原町)まで来ると、パチパチパチと音を立て家や竹やぶが燃えているのが見えた。そして大里駅を通りやとと与那原へ着いたが、家には誰もいなかった。そこへ私が家に帰ってきているのではないかと様子を見に来た父が、みんなは暗渠(現浜田区)へ避難しているということだった。そこには一区やその周辺の住民が避難していた。指定の避難場所ではなかったが、橋の下は大きな下水道になっていて、住民が隠れるために集まったということだった。

● **眞境名の亀甲墓**

一九四五(昭和二十)年一月の空襲で家が焼けたため私達は運玉森の後ろ側に掘ってあった壕へ避難することになった。学校へは歩いて通うことになったが、その頃からはほとんど授業はなく、あちらこちらの壕掘り作業が主だった。やがて、その壕も危ないと言われるようになり、私達は運玉森の壕を出て山川(南風原町)を通り、激しい砲弾の中を木陰に隠れたりしながら眞境名(南城市大里)へ着いた。そこで山内俊光さん家族と与那嶺一郎大尉の家族と会っ

た。大きな亀甲墓があり、そこは静かで弾が飛んでくるとはなかった。墓には「この使用を禁ずる。与那嶺大尉」と書かれていた。大尉はいなかったが、与那嶺大尉の家族の人が山内さん家族と私達家族も一緒に入れてくれた。そこでは一カ月ほど過ごした。やがて静かだった真境名にも砲弾の音が聞こえるようになった。

● 兄の死

真境名の山中にあった亀甲墓に避難していた私達は、敵が迫って来ていることを知り、兄の誘導で山を下り目取真（南城市大里）の集落へ移動した。すると「兄さんがやられたー」という声が聞こえた。父たちが駆けつけて見ると、兄は砲弾の破片で負傷し、田んぼの水を飲みに行ったらしく、そこに倒れていたということだった。男の人達が民家の戸板をはずし、兄を乗せ兵隊が掘った壕へ運び、手当てをした。「水が欲しい、水が欲しい」と兄は苦しそうに言った。そこでガーゼを濡らして吸わせたが、兄は寝るように息を引き取った。壕の外では雨が降っていたが、父と数人の男の人達が埋葬してくれた。兄が亡くなった日は一九四五（昭和二十年）五月二十四日であった。

● 姉の死

私達は、真境名から後原（八重瀬町具志頭）を通り、新垣（糸満市）へ着いた。そこには兵隊が一人で入る蛸壺があり、水が溜まっていた。

夜だったので、濁っていることも知らず、その水で米を研いで炊くと鍋底には土が溜まっていた。上のほうだけをとり、一日二食分のにぎりめしを作った。私達はさらに南部へ向かった。真壁（糸満）へ着いたとき、艦砲の破片が次姉和子を直撃し、姉は即死した。父と母で姉を埋葬した。姉が亡くなった日は六月十二日であった。

真壁では父と私が掘った一坪くらいの壕に十人くらいで入っていた。入り口はサトウキビで覆っていた。やがて壕の外から「デテコイ！デテコイ！」と日系二世の米兵から投降の呼びかけがあった。私達は応じ壕を出た。そしてご飯を炊いて食べたいからと、米兵に水を汲んできてもらい、明日連れに来てくれと頼んだら、応じてくれた。

翌日、米兵が来て私達は伊良波（豊見城）の収容所まで歩かされた。男子と女子に分けられ、女子供は石川の収容所へ連れて行かれ、父は大浦（名護市）へ連れて行かれた。石川の収容所では、一つのテントに五十人ほどが共同で生活をした。半年ほどして大見武の収容所へ移動した。そして今の新島区に戻り規格屋に割り当てられそこに入ることができた。



戦後の規格住宅

● 入隊

一九四四（昭和十九）年の後半から日本の戦況は次第に厳しくなっていた。兵役召集は一歳からであったが、一年引き上げられ大正十五年生は翌年の一月に徴兵検査があり、現地入隊となった。

三月一日、与那原の浜田にあった兵舎で、野戦重砲二十三聯隊（球三一〇九部隊）へ入隊した。その日は朝から空襲で入隊するとすぐに各中隊に配属された。

私は配属先の東風平村屋宜原（八重瀬町）にあった第二大隊第六中隊に行つた。中隊での初年兵訓練は二十日間ほど行われた。訓練後は、屋宜原の民家で分隊ごとに寝泊りし、戦闘に備えた。

● 米軍上陸

その年の四月一日、米軍が読谷村に上陸した。日本軍の総攻撃後、私たち中隊も砲撃を開始し

聞き取り調査
人々の証言

敗戦を信じず
壕から壕

上原 光男

大正15年生
中島区

た。砲撃に備えた大砲（十五糎榴弾砲）四門で敵軍へ砲弾を発射した。しかし、敵軍から発射された砲弾の数は何十倍にも及んだ。砲撃開始から三時間後に敵の艦砲射撃が陣地壕に直撃して、四門の大砲は土砂で埋められてしまった。

「すぐに避難せよ！」の命令が出た。砲弾が落下する中、全員が屋宜原の集落へ逃げ込んだ。翌日の夕方、大砲を掘り出すため戻って来た。第四分隊の大砲一門だけを掘り出し、牽引車で屋宜原の集落へ移動し、砲撃を開始した。

屋宜原から湧稲国（南城市大里）で一週間。古堅（南城市大里）を通ったとき、雨乞森にあった観測所から無線で命令を受け、そこで中城に向けて一時間に百発も砲撃した。

宮平（南風原町）を通り、そして五月下旬には豊見城の長堂に着いた。ここでは、米軍が首里に進撃して来たため、日本軍は首里から撤退するとの無線連絡があった。それで私たち分隊の野戦重砲隊も撤退することになり、長堂から糸満の新垣まで移動となった。



昭和20年4月1日 読谷村の渡具知海岸

● 大砲を破壊し、斬り込みへ

新垣には、撤退した日本兵が大勢いた。そこ

から宇江城（糸満市）の集落に向かい夕方には着いたが、そこも避難民がいっぱいだった。私たちは壕の入り口で中の避難民に向けて砲弾をちらつかせた。「立ち退かなければ爆破させる」と説得した。そして避難民が出た後に私たちは壕に入った。

翌日、私たちは壕を出て砲撃を開始したが敵軍の反撃で負傷者と死者を増やすばかりであった。そのときの二人の負傷者は壕に残し、大砲は砲身の上部和下部に砲弾を入れ破壊し、他の隊員には斬り込みに行くようにとの命令が出て、戦火の中を隊員は出て行った。

そのとき私は、宇江城で脚を負傷した鈴木小隊長を背負い、部隊の最後の集合場所である大度（糸満市）に向かった。

● 山原へ突破せよ

一九四五（昭和二十）年の六月十八日頃、大度の小高い山陰に斬り込みへの生き残りが集結した。翌日、「歩ける者は三人ずつ組み、山原へ突破せよ」と命令が出た。私は中西班長と石橋兵長の三人で組み、日が暮れてから大度を出た。必死で歩き、一晩で摩文仁の海岸にたどり着いた。

摩文仁の海岸に着くと、そこには数千人以上の避難民や日本兵が岩陰に隠れていた。そこはなぜか砲弾の音もなく静かであった。そのとき私は、三人で移動するより一人のほうが敵兵に見つからずに避難できると考えた。その日の夕

方、二人からそつと離れ、避難民の中に紛れ込んだ。

● 一人で避難してから

摩文仁の海岸を山手の方に登って行き、照明弾の間をぬって匍匐前進で北をさして進んでいった。夜が明け初め、夕方に出てきた摩文仁の海岸を振り返って見るとそこからわずか一キロしか離れていなかった。やがて日が昇り、周りを見渡したとき、五メートル先に黒く膨れて腐臭を放った日本兵の死体があった。昼頃に米兵が一人やって来て、その死体にガソリンをまいて火を点けた。私は体を倒した状態でその様子をじっと見ていた。もし見つければ自決するつもりで、持っていた手榴弾の信管に手をかけていた。米兵は私を見つけることなく去っていった。



糸満市 摩文仁海岸

摩文仁から喜屋武岬までは、至る所に米兵が未開封のまま缶詰やタバコが捨ててあり、おかげで食べ物には困らなかつた。こうしてさまよい歩いているうちに日本兵九人ぐらいと共に行動をしていた。摩文仁を出てから一週間経った頃、私たちは東風平国民学校近くで見つけた壕に入った。

昼間は敵に見つかるのを怯えながらも体を休め、夜になってから食料を探しに壕を出て行くという生活の毎日であった。それから二カ月ほど経っただろうか、壕の外から米兵の声が聞こえてきた。やがて米兵は灯りを照らして壕の中に入って来た。だんだんと近づく足音に私たちは緊張し、怯えた。兵長が銃を構え、十メートル先で米兵が二人見えたとき一人を撃った。もう一人は慌てて大声を上げて逃げ出した。

しばらくして宣撫班（日本兵の捕虜）が来た。壕の入り口で、「遺体を持って、出て来い！」とスピーカーで呼びかけていた。私たちは宣撫班が攻撃してこないことが分かり、じっと日が暮れるのを待った。宣撫班がいなくなったのを確認し、その間に食糧などを背負って私たちは壕から逃げ出した。

今思うと、東風平の壕を出てから大砲で花火のようなものを打ち上げるのを見た覚えがあるので、その頃にはすでに終戦の八月十五日を過ぎていたのだろう。

● 変わり果てた与那原

それから日中は南風原で逃げ隠れし、夜には首里からのトラックの往来が激しい那覇から与那原の街道を越えた。翌日には池田（西原町）集落辺りで壕を探して、そこで昼を過ごしていた。そこで会った日本兵から北への突破はむずかしいと知らされ、別の壕を探して落ち着くことにした。そこは近くに運玉森があり、かつて

激戦地で見つけた大きな壕である。近くの弾痕に米軍が捨てた未開封のレーションや缶詰などがあり、また砲弾の穴に水が溜まっていて生活には困らなかつた。運玉森の稜線まで行き眼下を見下ろした。そこには敷き均されて変わり果てた与那原の町が見えた。

ある日の午後、遠く離れた農道から、米兵が私たちに手招きをしているのが見えた。私たちは驚いてすぐに壕の中に隠れた。間もなく米兵が壕の入口まで来て、中に発煙弾を投げ込んだ。呼吸が困難で苦しかったが、口に布を当て、日が暮れてから私たちは壕を飛び出した。

北には行けず、私たちはまた南へ引き返すことにした。摩文仁の海岸を出て三カ月ほど経った十月頃、南風原の津嘉山で壕（司令部壕）を見つけたが、そこには先に日本兵が数人入っていた。壕の中はとても広く、二段式の板で作られたベッドがあった。そこには毒ガスマスクをしたまま兵隊が亡くなっていた。しかし、ここはとても静かで、壕の中には米が残されていて、近くに井戸もあった。食料は近くの集落の民家の焼け跡から残された冬瓜などを探して食べていた。

こうして壕生活を一カ月ほどした頃から、宣撫班が毎日やって来て、壕の入り口に本土の新聞を置いて行った。

● 敗戦を信じず

ある晩、壕の入り口で二人の宣撫班に出会った。そして私たちは敗戦を知らされた。しかし

そのまま宣撫班を帰し、私たちのことが米兵に知られることを恐れ、みんなと話し合い、兵長が小銃で二人の宣撫班を射殺した。その遺体は壕の奥に葬った。

それから夜になると宣撫班が何度か訪れた。間もなく私たちは捕虜になり、屋嘉の収容所へ送られたが、その後も射殺された宣撫班のことを誰も口外することはなかった。

私は亡くなった宣撫班のことを思うと、心から冥福を祈ると共に自責の念にたえない。

聞き取り調査
人々の証言

戦渦の中を
逃れ

知念 尚子

昭和7年生
板良敷区

● 父の召集

私が小学校三年までは家族と一緒に母ツルの出身地の久米島に住んでいた。その後、父の故郷の板良敷に移って来て、私は第一大里尋常高等小学校に転校した。

私が五年生に上がった頃、父の久助に召集令状が届いた。父は佐世保に渡ったが、体格が大きかったため入隊検査も無く、甲種合格となった。そこには、父より三カ月前に入隊していた

隣近所の具志堅さんと花城さんがいた。二人から父は「あなたは人差し指が無いので、それを理由にして不合格になり、沖繩に帰ってほしい」と頼まれた。沖繩の家族は男手がなく心配とのこと、私の父に自分たちの家族の面倒も見てもらいたいと考えたのである。

幸いにも父は不合格となり、一カ月ほどで戻って来た。しかし、安心したのも束の間で、小禄（那覇市）の海軍山根部隊に入隊することになった。そこでは、主に海軍小禄飛行場での作業に動員され、宿舎は小禄尋常高等小学校だったようだ。のちに父は海軍司令部壕豊見城市に入ったのではないかとの話を聞いた。多分そこで戦死したと思うが、遺骨は拾えないままである。

● 学校の閉鎖

父が召集され、我が家は大きな働き手を失った。母は慣れない土地で子供四人を養うため、毎日のように働きに出た。姉の米子は脚を痛めて入院中だったので、壕掘り作業への婦人会の動員がある時は、私は学校を休んで母の代わりに作業に出ることが多かった。

戦争が近づくにつれ、学校では勉強よりも軍事訓練の時間が増えていった。一九四四（昭和十九）年、私は第一大里国民学校の六年生になっていた。その頃から学童疎開や一般疎開が始まり、生徒の数も三分の一に減っていた。板良敷から通う生徒は私だけだった。

四月から学校は軍隊の宿舎になり、閉鎖され

ることになった。仮の教室は古堅（南城市大里）にあった大きな家に設けられ、そこに学校から机や椅子を運んで勉強していたが、私は家事手伝いや妹の和子と弟の勉の面倒を見なければならぬので、次第に学校に行けなくなった。

● 十・十空襲と金武への疎開

十月十日の朝八時半頃、東の空に三機ずつで編隊を組んだ九機の飛行機が現われた。低飛行で那覇方面に向かうのを近所の人たちは、森の高い所（現板良敷区の創価学会々館辺り）に上がって眺めた。みんな友軍の飛行機と思ひ込み、空を見上げて、手を叩きながら歓声を上げた。やがて兵隊帰りの崎原さんが「敵の飛行機だ！」と叫ぶと、皆それぞれの壕へ逃げ込んだ。

十一月二十二日、兄の久雄に召集令状が届いた。翌日には球部隊に入隊した。一九四五（昭和二十）年の三月、子供のいる家族は山原へ疎開するようにとの通知を受け、私たちの家族も金武へ行くことになった。出発した日は六年生の卒業式の前の日の二十二日であった。二十三日の卒業式が行なえなかったことは、今でも残念でならない。

板良敷の人たちは日本軍のトラックに乗せられて金武に着いた。私の家族五人と伯父の知念蒲家族五人は一人住まいのおばあさんの家に泊めてもらった。翌朝空襲警報のサイレンが鳴り、外へ出るとたぐさんの人が駆け足で逃げていたので、私たちも右往左往しながら、その後を追

った。鍾乳洞に避難したその日は四月一日であった。鍾乳洞の中は暗く、足元を見ると中央には湧き水が流れていて、私たちはその左右の土手に座って過ごしていた。鍾乳洞の中では炊き物ができないので、最初のうちは、与那原から持って来たウムクジ（サツマイモの澱粉）と黒糖を水で溶かして飲んでいった。

鍾乳洞に入って六日ほど経った朝、姉と従姉の初子が食事を作るため外に出た。姉たちは外で知念一郎さんとその妻ウサさんと娘の安子の三人と出会い、私たちが居る鍾乳洞へ連れて来た。それから二、三日の間、洞内の避難民は戦況も分からずただ毛布にくるまりながら怯えて座っていたが、ある時入口のところから「死を覚悟するしかない」と言う声が聞こえた。避難民の中には更に北の方へ避難しようと言う人もいたが、一郎さんが「ここでも食糧が無いのに、これ以上山奥へ逃げても食糧が得られる保障はない。自分たちは島尻に帰るから、あなたたちはこれからどうするか、自分で決めなさい」ときっぱり言った。私たちの家族は一郎さんたちと行動を共にすることになり、五世帯二十一人で洞窟を出た。

● 山中へ避難・捕虜となる

平地に下りて行くと海に敵艦が浮いているのが見えた。浜には米軍の仮設兵舎も建っていた。まだ夜が明けきらない薄暗い中を見渡していたら、タバコを吸ったときの火の灯りで米兵の顔が見えて、銃を持った兵隊が並んで立っていた。

私は米兵の体の大きさにびつくりし、また逃げようとした。すると一郎さんから「今逃げたらだめ。私が先頭に行く。もし私が撃たれたら、その隙に逃げなさい」と言われた。一郎さんはハワイ帰りなので、米兵の性分をよく知っていたのである。私たちは両手を挙げて米兵たちにお辞儀をしながらその前を通り過ぎることができた。

金武からは、石川に連れて行かれた。道を何台もの戦車を通り、まるで戦場のようなであった。米兵が戦車から降りて来て、私たちにクレイシオンをくれた。石川から栄野比（うるま市）に移されると、たくさんの米兵に監視されながら、瓦屋根の大きな家に入れられた。捕虜になったその日は、ちょうど四月四日であった。

そこでは、米軍はそこに食糧を運んできて、難民の前でダンボールから缶詰などを出して渡していた。避難している間ほとんど食べていなかった難民たちは、ダンボールから食べ物を出すのも待てずに、子供も大人も我先にと米兵の周りに集まった。私たちは一郎さんから「米兵はみんなに同じように与えてくれるから、見苦しいまねはしないように」と注意されていたので、木の下でじつと座つてその様子を見ていた。しばらくすると、米兵が私たちのところにも缶詰が入った未開封のダンボール箱を持ってきてくれた。そのときの事を私はよく覚えている。

● 収容所を転々

それから何日かが過ぎ、私たちは夜中に桃原

（沖縄市）の集落外れで米軍トラックから降ろされ、夜が明けるまで近くにあった砂糖小屋で過ごした。桃原では、二十一人が一緒の空き家に入れられた。食料は、配給される量だけでは足りなかった。ある日、一郎さんと叔父の三人で食料を探しに野嵩（宜野湾市）まで出かけた。一軒の空き家に入ると、そこには米や豆などが保存されていた。台所には煤で黒くなったハガマ（炊飯用の釜）があったので、私は悪いと思つたがそれも一緒に持ち帰ることにした。



野嵩で見つけた鍋

桃原では毎日のように砲弾の音が聞こえていたので、南部ではまだ戦争が続いていたようだ。八月十五日、突然米兵たちが銃口を空に向けてパラパラと銃を撃ち鳴らしながら歓声を上げた。おそらく空弾だったと思うが、私は銃の音に驚きながら、その様子を見ていた。その時、日本が負けたことを知った。

桃原からは船越（南城市玉城）のテント小屋に移され、そこで十四日ほど過ごしてから大城（南城市大里）に移された。大城では親戚を含む四家族で、馬小屋をいくつかに仕切つて一緒に暮らした。

● 板良敷に帰る

一九四六（昭和二十一年）年、私の家族は集落の人たちの指示に従い、最初は一軒の規格住宅

に崎原ナへさん家族と二世帯で入り、のちに一世帯で住宅に入ることができた。やがて学校は第一大里初等学校の名称で再開された。校舎は茅葺で、運動場は艦砲の穴だらけだった。そんな中で卒業式が行われたが、同級生はたったの八人だけだった。式は先生の挨拶だけで終り、記念写真も無い、ほんとに寂しい卒業式であった。生活が落ち着いた頃、父と兄の戦死についての知らせが入った。兄は入院先で亡くなったとの話は聞いたが、二人がいつ、どこで亡くなったか詳細は分からない。

昭和二十七年、二十歳になった私は親の薦めもあって、避難中お世話になった知念一郎さんの次男の善達と結婚することになった。桃原にいた頃、野嵩で拾ったハガマは、のちに義母となるウサさんの手に渡っていたが、私たちの結婚を機にそれを譲り受けた。結婚当初は夫の毎日の弁当はそのハガマを使用していたが、時代と共に使わなくなつた。思い出し詰まったハガマなので、今も大事に保管して、私の宝物になっている。



昭和23年頃、上原洋裁学校の卒業記念写真

2列目右端が尚子さん・現森下区JA農協近く